
気のむくままに

ダイス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気のむくままに

【Nコード】

N1446X

【作者名】

ダイス

【あらすじ】

子供を助けようとしたら俺が代わりに死んじまった
まあその事はいいい俺が選んで自分がやったことだからな
さてと俺が行くのは地獄かな天国かなどっちだろ？

えっ!?! やっぱ俺死んだの? (前書き)

どうもこの小説が初投稿のゼロです
駄文ですが駄文なりにがんばります (

えっ!?! やっぱ俺死んだの?

えーと皆さん初めまして今さっき神に殺された不知火翔しらぬいしょうです
ちなみに別に頭がおかしくなったわけじゃない俺は正常だ……たぶん

いや俺も本当によくわかんねえんだよ

確か俺が神に殺される前は本屋に行ってロウきゅーぶの新刊を買って家に帰ろうとしたんだったかな

まあそこまではよかったんだ、ただそのあとがいけなかった

俺がウキウキしながら家に帰っていたら

「あー、やべーよ超楽しみだよ♪こーゆう時はさっさと帰るkってあれは子供か?」

道路の真ん中で足を押さえて痛がってる子供がいた

「おい、大丈夫か?」

と声をかけると

「た、立ちたいんだけど痛くて立てない」

どうやら足を挫いたっぽいな、まあこれも何かの縁だな、と思い、
起こして上げようとした時に横の方から何やら音が聞こえた

ブオオー

それはスピードを上げてどんどんこちらに迫ってくるトラックだった
「おいおい冗談じゃねえぞ！」

俺はすぐにその場から逃げようとした、当たり前だろ俺は自殺願望者じゃないからな
だが、

「ちっ、おい早く立て！このままだと死んじゃうぞ」
さっきの子供は足を挫いたせいで、立てないでいる

「くそ！しょうがねえ、手をだせ」
と俺は子供に指示をだす

「う、うん」

子供の方は、俺がなにをするか分からなくて困惑しつつ手をだす

「よし、いくぞ、あらよっと！」

そして俺は手をだした子供を少し引っ張り担ぎ上げ道路の端に投げる

「えっ！？うわ」

子供は驚いていたが良かった怪我はしてないようだ

「ただまあ、こっちは怪我じゃあ済まなさそうだけだな」

そして俺は、トラックにはねられこの世をさった

あー口ウきゅーぶ読みたかったな

えっ!?! やっぱ俺死んだの? (後書き)

すみません長くなりそうなのでいったんきります

転生キターー (前書き)

この前の続きです

転生キターー

まあ、それで俺は死んじゃった訳だが、最初こっちに来たときはかなり驚いた

なんせ気がついた時にはなんか真っ白な空間にじいさんが髭いじりながら立っていてしかもそのじいさんは

「ふむ、気がついたかの？」

「えーと、どちら様で？」

「うむ、自己紹介が遅れたのわしは神じゃ」

めっちゃくちゃ痛いじいさんだった

「はい？」

「じゃから、わしは神じゃ」

俺は自分の耳がおかしくなったと思ったがどうやら正常らしい

「おい、じいさんとりあえず脳外科にでもいったほうがいいぞ、いや精神科か？」

「別にわしは頭がおかしいわけじゃないぞ！？」

「あー、はいはい、じいさんもうわかったからとりあえず病院いつてこい」

「じゃから、あーもう面倒じゃ、今証拠を見せてやるぞい」

「証拠？なにをする気だ、じいさん？」

じいさんが急に証拠？を見せるといって目を閉じた

「いや、これはしょうがないのじゃよ、こうやって目を閉じんと相手の心が読めんのじゃ」

はい？今このじいさん俺の考えてることに答えなかったか？

「うむ、これが神の力のひとつじゃ」

読心術か、なら試してみるか、おいじいさん他になんかできねえのか？

「できんこともないのじゃが力をつかうのでな疲れるのじゃ」
なるほど、マジっぽいな

「やっと信じたか」

そう言ってじいさんが目を開ける

「ああ、まあ一応神ってのは信じるがその神様が俺に何のようだ？」

「うむ、それはじゃのう」

そう言ってじいさんは気まずそうな顔をしながら俺にとんでもないことを言いやがった

「実は、お主は本当だったら死ぬ予定ではなかったのじゃ」

ふーん、そうか俺は本当だったら死ぬ予定じゃなかったのかって、えっ！？

「おい、じいさんそれってどーゆう意味だよ！」

「実は、お主が助けた子供は、あのまま倒れたままできて、トラックと地面の間にギリギリで入り奇跡的に助かるという予定だったんじゃない」

はあー！？だったら俺は

「死ななくてもいいのに死んだってことか？」

「残念ながらの」

「マ、マジかよ…」

「本当に済まんの」

そう言ってじいさんは頭を下げる

「いや、きにしないでくれ、そうだあの子供は無事か？」

「安心せい、擦り傷ひとつないぞい」

「そうか、まあくよくよしてもしようがねえな、じいさん俺は天国と地獄どっちにいくんだ？」

「いや、お主はどちらにもいかぬぞ？」

「えっ？じゃあ俺はどうするんだ？」

もしかして消滅とか言わねえよな？

「お主には、転生してもらうぞ」

なに？転生だと！

「おい、マジかじい嘘だったらぶっ飛ばすぞ！！」

「神は冗談は言うが嘘はいわぬ」

よっしゃー転生キターー

「お、おいじいさん俺はどこの世界に転生するんだ？」

「お主転生させる理由を聞かぬのか？」

うん？ 転生する理由？

「んなもんでもいい！俺はどこの世界に転生すんだ、はやく教えてろ！！」

「そ、そうかえーとお主が転生する世界はお主が選んでいいぞい」

「よし、なら転生する世界は、そうだなー……あっそうだロウきゅーぶの世界で」

「うむ、了解したぞい、あと願いがあればわしの叶えられる範囲内なら叶えよう」

おっ、チートってやつか

「ちなみに何個までだ？」

「4つまでならなんとかいけるぞい」

4つ、じゃあ

「身体能力を今の二倍くらいにしてくれ、あとバスケの才能を1を聞いたら100を知るくらいで、あと女バスの皆と同年代にしてくれ、あとさいごは原作の知識を消してくれ」

「知識はいらんのか？」

「ああ、だが原作キャラ達の性格とかの知識は消さないでくれ」
未来は分からなくていいけど性格とかは知っておきたいからな

「うむ、わかった、お主の願いすべて叶えよう」

「うわ、めっちゃくちゃ楽しみだ♪おいじいさんはやく俺を転生さしてくれ」

「うむ、あー、いいわすれたのじゃが、お主の身体能力とバスケの才能は上限を無くしといたからの、それじゃあの」

「ああ、じいさんいろいろサンキューな」

そう言い終わった時俺の意識は途絶えた

転生キターー (後書き)

次はやっとうきゅーぶの世界にいきます

オリ主紹介改（前書き）

間違いがあつたので直しました

オリ主紹介改

名前不知火翔

性別男

性格基本的に穏やかだが怒った時はかなり怖く敵に回すと恐ろしい
転生する前の年齢19歳

転生する前は普通の大学生で運動神経も学力も中くらいでアニメや
漫画やラノベをよく読むオタクだった

転生した後の不知火翔

身長は160後半で愛莉よりも少し小さいくらい

顔は小学生なのにかわいいというよりかっこいい部類に入る

髪の色は黒で髪型はコードギアスのルルーシュのような感じ

原作キャラとの関係

真帆と夏日と紗季とは幼なじみ

愛莉とひなたと智花とは6年生になってから知り合った

原作開始？（前書き）

一 応原作キャラはでます

原作開始？

どうも転生して12年たち小学6年生になった不知火翔です
えっ？この12年の間なにがあったか？

言わなきゃ駄目なの？（駄目ですby作者）

しょうがない作者がうるさいから話すとするか…

回想

俺が気づいた時、俺の体は赤ちゃんになっていた
最初は少し驚いたけど転生したことを思いだし、納得した

しかし、仕方ない事とはいえ、この赤ちゃん言葉はどうにかならな
いのかねえ？

だが、俺が生まれて一年たった頃、俺はもう立つどころか、喋るこ
とも出来るようになった

いやゝ、あの時の父さんと母さんの顔は凄かったなゝ

鳩が豆鉄砲をくらったような顔してたからな

まあそんな感じで俺はどんどん成長していった

一時期は神の子なんて呼ばれたこともあった

痛い名前だったから俺としてはあまり好きじゃなかったけどな

んで、その噂が流れなくなった頃、確か小学校に通いだした頃かな
？日曜日に母さんと散歩がてら近くの公園まで行った時に、あの三

人に会った

その三人は、三沢真帆（みさわまほ）と永塚紗季（ながつかさき）と竹中夏日（たけなかなつひ）だ
最初はある三人だって分からなかったんだよね
でも公園に着いて母さんに

母さん「ほら、むこうにいる子達と遊んで来なさい」

って言われて、仕方ないかと思いつながら公園で遊んでいる三人に声をかけた

翔「なあ、俺も遊びに入れてくれないか？」
声をかけてから思ったが、もう少し小学生っぽく言えばよかったのだが、三人は特に気にする様子もなく

「うん、いいよ♪」

「まあ、数が多いに越したことはないしね」

「ああ、別にいいぞ」

最初に明るく承諾してくれたのは、金髪で元気のありそうな娘だった
次に承諾？してくれたのは、髪は水色で眼鏡をかけた委員長タイプの娘だった

最後に承諾してくれたのは、短めの髪をツンツンに尖らしている俺と同じ男だった

翔「ありがとう、んで何やるの？」

金髪の娘「えーと…何やってたっけサキ？」

委員長タイプ「あんた、さっきまでやってた事ぐらい覚えてなさいよ」

ツンツン「おい紗季、そのバカにそんな事いっても無駄に決まってるんだろ」

金髪の娘「何だと!! ナツヒだって同じようなもんだろ」

ツンツン「お前と一緒にすんなバーカ」

金髪の娘「もう許さねえ!」

なんか勝手にケンカを شدしたんだけど、でもそんなことよりも今、夏日とか紗季とか真帆って聞こえたんだが、もしかしてあの原作キヤラの三人か？
まあとりあえず二人のケンカを見てため息をついてる紗季？に聞いてみよう

翔「えーと、なあ俺まだ名前聞いてないんだけど」

紗季？「あっ、そういえばそうね、私の名前は永塚紗季よ」

マ、マジかよ…

翔「俺の名前は不知火翔だ」

紗季「あと、向こうでケンカしてるのは、おい！真帆、夏日もうケ

ンカは止めて挨拶しろ」

真帆「サキ悪いけどナツヒのバカを倒すまで少し待って」

夏日「紗季、すぐにこのアホ真帆を倒すから待ってろ」

紗季「だからケンカは、止めろ！！」

二人はケンカを止めようとはしなかったが、紗季がげんこつをした
らおとなしくなった

あれは痛そうだ、その証拠に、まだ頭の上に手をのせて下を向いてる

二人が回復するまで少々お待ち下さい

真帆「私の名前は三沢真帆！真帆かまほまほって呼んでね♪えーと
…」

翔「俺の名前は不知火翔だよろしくな、まほまゲフンゲフン…真帆」

まほまほって言おうとしたけど、無理だ恥ずかしすぎる！

夏日「うん？どうしたんだ具合悪いのか？」

翔「い、いや何でもないきにしないでくれ」

やめて！もう翔のライフは0よ！これ以上追い討ちをかけないで！！

夏日「そ、そうかまあお前が大丈夫ならいいけどよ…あっそうだ俺

の名前は竹中夏日だ、よろしくな」

翔「ああ、俺の名前は不知火翔だ、よろしくな」

なんだよ、めっちゃ良い奴じゃん夏日、こいつとは仲良くなれそう
だ♪

紗季「さてと、自己紹介もすんだ事だし、はやく遊びましょう♪」

真帆「おう♪でも何する？」

夏日「そうだな…翔はなにかやりたい事あるか？」

翔「うん？そうだな」

その日俺は、原作キャラの真帆と紗季と夏日の三人と遊んだ
そして、実はこの三人とは同じ小学校という事がわかったら真帆が

真帆「なんだ、おなじ小学校じゃん！これでまた今度遊ぶ約束がで
きるな！！」

と言って、俺がいいのか？と紗季と夏日に聞いたら

紗季夏日「まあいいんじゃない？（ないの）」

ずいぶん適当な答えをもらい、俺はその日から真帆と紗季と夏日の
三人と一緒にいるようになった

回想終了

翔「まあ、そこからどんどん時間がたって今はもう六年生になったって訳だ」

夏日「おい翔、次移動教室だから、はやく行こうぜ」

翔「ああ、でもだったら真帆と紗季とも一緒に行こうぜ」

夏日「別にいいよ、あいつらは」

うん？どうしたんだ？夏日の奴、確かによく真帆とはケンカしてるけど、様子がいつもと違うな…

これは昼飯食ってる時にでも聞くとするか

原作開始？（後書き）

今回はキャラのセリフの前に誰が喋ってるか分かるように名前を書いてみました

名前をこのまま書いていった方がいいかどうか、感想に書いてください m (m

女バスVS男バス!?(前書き)

今回はちょい短いです

女バスVS男バス!?

「なあ夏日、真帆達と何かあったのか？」

あれから時間がたち、今はもう昼になった

そして、俺は夏日に昼飯を食いながら何があったのか聞こうとしている

「真帆が部活創ったのは知ってるだろ？」

「ああ、女バスだろ？」

「その女バスと俺ら男バスが試合する事になったんだよ」

「なんで？」

「部活する時間を増やすためだ」

なるほど、大体読めてきたぞ

「あれだろ？お前らがその事を顧問に言って、そんでその顧問がその事を女バスの顧問に言ったらケンカになって、このままじゃ決まらないから、試合で決めようって事にでもなったんだろ？」

「よくわかったな翔!？」

いやいやそりゃ分かるさ

「女バスの顧問って美星だろ？だったら分かるさ」

「確かにそうだな美星だもんな」

ちなみに、俺と夏日が話している美星というのは、名前簗美星（たかむらみほし）

容姿はかなりのロリ体型

胸はない尻はでてない身長は150くらいで初めて見た時、「本当に教師か!？」といってブツ飛ばされたのは今でもよく覚えてる

だが、そんな奴でも俺達の担任でもあり女子バスケット部の顧問でもある人だ

ちなみに、男バスの顧問、カマキリこと……誰だっけ？まあいいや♪えーと、そのカマキリ先生とは仲がかなり悪いえっ？先生の名前くらい覚えろ？いやいや無理♪俺もあいつの事嫌いなんだよね
何か人を見下した目でいつも見てくるからムカつくんだよ

おっと、カマキリのことを説明してる場合じゃなかったんだ、急がねえと昼休みが終わっちまう

「おい翔、はやく行こうぜ昼休み終わるぞ!!」

あれ!？夏日の奴いつの間に食い終わったんだ？とにかく急がねえと!

俺はそのあと飯を急いで食って、夏日と一緒にある場所へ行った

「よし着いた!おい翔はやくやろうぜバスケ」

「お、おいとりあえず落ち着けよ夏日!？」

あと休み時間が少ししかないからなのか夏日が凄い焦って落ち着きがなくなっている……っていつもか

「落ち着いてなんていられるか!あと少ししかn」

キンコーンカーンコーン

夏日のセリフを途中でさえぎり休み時間終了のチャイムが鳴る

「さてと、夏日帰ろうぜ」

「ちくしょー!」

「いいじゃねーか別に今日くらい、いつもやってんだからよ」

「でも!...: そうだな今日くらいいいか」

「だろ? とにかくはやく帰ろうぜ? 授業に間に合わなくなっちまう」

「ああ、そうだな」

こうして、俺達はバスケが出来ないまま教室へ戻った

女バスVS男バス!? (後書き)

カマキリ先生の名前ってありましたっけ？
知ってる人がいましたら教えて下さい

部活見学（前書き）

美星ってこんな感じなのかな？

部活見学

「ふうー、やっと帰れる」

俺はもう授業は終わったのでさっさと帰ろうとするが

「帰る前に夏陽が昼言ってたことが本当か聞くとするか」

俺は教壇の近くで眠そうにあくびをしている教師？の所まで行く

「おい美星少し聞きたいことがあるからそれでかいあくびをやめろ」

「んー？なんだ翔か、どうしたんだー？」

「だるそうにしてんじゃねえよ！おい美星、女バスと男バスが試合するって本当か？」

「本当だけど？」

おいおいマジかよ…

「お前正気か？男バスは地区大会で優勝する程の実力なんだぞ！？」

「大丈夫だよ」

そう言って美星は急に真面目な顔をする

「あの娘達は男バスには絶対に負けないよ」

「絶対か…勝算は？」

「私の勘だ！」

と、ない胸を自信満々に張って言う美星

「廃部だなこりゃ…」

「んなわけないだろ!!」

「それはどっちのことだ？俺が言った廃部の事か？それとも勝算のほうか？」

俺の希望としては、勝算の方を願う

「んなもん、廃部の方に決まってんだろ」

この瞬間、俺の希望が粉々に粉碎された

「それに一応勝算もあるぞ」

「あるならさっさと言えよ!？」

「まあまあ、そんな怒るな今話してやるから」

何か、かんしゃく起こした子供をなだめるような言い方が腹立つ

「私の甥がいるんだけど、そいつ高校生でバスケットがスゲー上手いからそいつにあの娘達のコーチやつてもらおうと思ってる」

「ふーん、でもその人バスケットが上手いんだったら部活入って忙しいんじゃないかねえの？」

「あー、その辺は大丈夫だあいつ今部活やってないから」

うん？美星の言い方だと部活に入ってるけど何か理由があって出来ないように聞こえるな

あれ？美星の甥ってもしかしたら、いや高校生でバスケットが上手いなんて一人しかいねえじゃん!？

「なあ美星、その人の名前って長谷川昂って人か？」

「ああ、そうだけどなんで知ってたんだ？」

こりゃあ、楽しみになって来たな♪

「美星、その人が来るのっていつだ？」

「一応明日だけど、そんなこと知ってどうすんだ？」

「よし美星、俺明日部活見学に行っていাকা？」

「その前にまず私の質問に答えろ！！」

美星がチョップを繰り出した！！

翔はなんとか避けた！！

「何すんだよ！？」

「私の質問に答えないからだ」

「そんなんでチョップすんなよ…、バスケットが上手くてこの辺じゃ有名だからだよ」

「あっそ、えーと確か明日見学だっけ？別にいいよ♪」

「……………もういいや、じゃあ明日見学に行くからよろしくな」

そう言って俺は帰ろうとする

「にゅふふ♪、もしも女バスが気に入ったら、入部してもいいぞ♪」

さっさと帰ろう……

部活見学（後書き）

なつひの名前は夏陽だったらしいので今回から変えました

メイド部？（前書き）

すいません遅くなりました

メイド部？

よし、やっと授業が終わった

いやー、楽しみだなー♪どんな感じのバスケをするんだろ

やっぱ、知将なんて呼ばれてるから、落ち着いた感じなのかなー

おっと、そうだ一応見学のこと、美星から聞いてるかどうか聞くとするかな

あれ？あいつらいねえや、おっそうだ夏陽にでも聞くとするか

「なあ夏陽、真帆が…いや紗季が何処にいるか知らねえ？」

真帆じゃあ話しにならないことに気付き紗季に変える

「紗季か？さあな、女バスの奴らと一緒に体育館に行つてまた、お遊びバスケでもしてんだろ」

体育館か…：もしかしたらコーチが来てるかもな

「サンキュー夏陽♪」

俺は夏陽に礼を言つて体育館まで走る

「おし、やっと着いたって あれ？誰もいねえ」

体育館に着いたはいいがそこには紗季どころか女バスのメンバーですらないかった

「あれ？もしかして体育館にまだ着いてなかった…：なんてあるわけないか」

何故ならあいつらは俺よりも先に教室をでていったのだからな

「うん？誰だあれ？誰かが体育館に入つて…：って真帆かよ」

体育館の更衣室から出てきたのはいつも元気で能天気バカな真帆だった

「あれ？ ショウじゃん♪ どうしたんだよあつ、分かった男バスのスパイだな！ 例え幼なじみでも容赦しないぜ！ てりゃーって痛！」

「全く… あんたはなにやってんのよ」

「よっ紗季、真帆」

「翔！？ 何で体育館にいるの」

「いや、何でって見学に来ただけど、美星から聞いてないのか？」

「聞いてないわよ、そんなこと」

「おいおい、仕事しろよ全く……なあ紗季真帆一つ聞いていいか？」

「ええ、何？」

「どうしたんだ？ ショウ」

真帆は紗季に叩かれたが、もう回復していた

「その服装は何だ？」

これは俺がさっきからずっと言いたかった事だ
何故なら今二人の服装はなぜかメイド服になっている

「こ、これはその」

「あー、これ？ どうだ、ショウ似合ってるだろう」

恥ずかしそうにスカートをつかんでもじもじする紗季と、それとは正反对で逆に俺に見せつけてくる真帆

うん♪誰も俺の質問に答えてくれないね

「真帆、紗季二人ともどうしたのって不知火君!？」

「うん？智花か、ってお前までメイド服かよ」

「どうしたの、智花ちゃん？」

「ともか、おおきなこえだして、どうしたの？」

愛莉とひなたが智花の大声を聞いてこっちへ来た

ちなみに、さっきからでている智花、愛莉、ひなたというのは、俺達と同じクラスだ

いつも喋り方が丁寧な感じなのが湊智花（みなとともか）

いつもおどおどしている感じで俺より背がでかいのが香椎愛莉（かしいあいり）

その愛莉とは正反对でかなり背が小さく何か守りたくなるようなオーラをだしているのが（夏陽の話によると）袴田ひなた（はかまだひなた）

あと、何故俺がこいつらを名前で呼んでいるかというと、愛莉には何故か名字で呼んだら、顔を少し赤くして名前でいいと言われたひなたも名字で呼んだら「ひなたでいいよ？」と言われたのでさすがに断ろうとしたが、クラスの奴らから殺気を感じたので名前で呼ぶことにした

そして、智花は真帆が「アイリーンとヒナは名前で、もっかんだけ名字っておかしくね」とか言って智花と呼ぶことになった

おっと、そろそろ話しに戻るとするか

「お前らもメイド服かよ」

「し、不知火君！？何でこんなところにいるの！？」

「おー、しらぬい♪ひなのメイドをみにきたの？」

「いやちげーよ！？つか頼むから、そういう冗談はやめろ」

夏陽とかクラスの皆に殺されるから

「うんわかった♪」

本当にわかってんのか？

まあいい、あれ俺さっきなんかこいつらに言おうとしてたことがあったような……あっそうだ！

「おいもう一回聞くがなんでお前らそんな格好してんだ？」

「えっ？何だよ、そんなことか」

「いや真帆、そんなことって……俺にとっては結構重大なことなんだが」

また、真帆の飽きる癖がでて「メイド部にしよう♪」とかだったら夏陽がキレて暴れるかもしれないからな

「これは、真帆が提案したのよ」

と紗季が言うって、ええ！？マジでメイド部創るのか？

「真帆がこのメイド服を着て今日来る先生を歓迎しようって言って私達にこれを着させたのよ」

何だよ、メイド部創るんじゃないのか……ほっとしたような残念なような

「ふーん、んで智花と愛莉はいやいや着て、ひなたと真帆はノリノ

りで着たってわけか……あれ？でも紗季わ？」

「私はもう諦めたわ」

「何だよ、諦めたってそれにもっかんとアイリーンだっていやいやじゃないぞ!!」

ちなみに、もっかんは智花、アイリーンは愛莉だ

「本当か智花、愛莉？」

つと、俺が聞くと

「「……………」」

おいおい無言だよ

「ちょっ、もっかん、アイリーンなんで無言なんだよ!？」

真帆がなんか言ってるが無視しよう

「えーと、だいぶ話しがずれたが俺は今日見学に来たんだよ」

「えっ、不知火君がここの部活に？」

「ああそうだ」

「でもここは女バスだよ?どうして?」

「今日来るコーチがどんなバスケをするか、みにきたんだ」

「でも、その先生指導するだけよ? 実際試合したりはしないと思うわよ?」

「……………えっ？」

「いや、えっ？ じゃないわもしかして気づいてなかったの？」

「うわー、そんなのあたしでもわかるぞ」

……………は、あははは

「何いってんだお前ら？ んなこと、知ってるに決まってるんだろ♪」
この俺が真帆でも気づいてることに気づけないわけねえだろ♪
ってこらそこ、笑ってごまかしたとか言わない

おい真帆何大爆笑してんだてめえは

「俺はただお前らが本気かどうかみにきたただけだ」

「本当……？」

「本当だ！ ったく、おいそろそろコーチが来る時間だろ？」

「おー、そうだった」

「よし皆、配置につこう♪」

と、真帆が言ったら皆が配置？ とやらについた
さて、俺は隅っこで見学をするか

メイド部？（後書き）

智花と愛莉の口調がかぶってしまふ

目標のシュート(前書き)

やっとなをだせた

目標のシュート

「うん？ やつと来たか……おい真帆、コーチが来たぞ」

「よしみんな、ちゃんとあわせて言うんだぞ♪」

真帆達がいる扉の奥から何やら声が聞こえたので教えてやるしかし、いったい真帆は何をする気なんだ？

と、考えている内に扉が開けられ、結構童顔な愛莉と同じくらいの男の人がいたが

「お帰りなさいませ！ ご主人様！」

ガラガラ…バン！

すぐに閉められ見えなくなってしまった

おいおい、もしかして歓迎ってあれのことか？ あんなんで喜ぶのは一部の危ない人だったの……

そのあともう一度扉が開けられたが、真帆達はさっきの台詞を一言一句違わずに言って、コーチは困っていたが急に腰を直角に曲げ「申し訳ない！ ミホね……篁先生が無茶を言ってますなかつた」

と、このメイド姿の原因は美星だと勘違いをして、謝ってきた

「あの、確かに篁先生はいつも無茶苦茶やってますけど、今回ののは違いますよ」

「えっと、篁先生に無理矢理着せられたんじゃないの？ それ」

俺が誤解を解こうとはしたがまだ少し疑っているようだな
まあ美星だし疑われても仕方ないか

「違いますよう、これはご主人様への歓迎の表れで、みんな自主的に着たんです。ね、もっかん？」

真帆がコーチの言ったことを否定して、智花に同意を求めるが

「……………はい」

かえってきた返事は蚊の鳴くような声の同意だった

真帆はバカなのか？さっき俺が聞いた時嫌そうにしてただろうが……..
いや、バカだったな

「あの、ご主人様。初対面ですし、とりあえずみんなで自己紹介とか、しませんか？」

俺が真帆に呆れていると、紗季がそう打診する

そして、コーチがそれに賛成して、自己紹介を始めようとするかと思っただが、その前に呼び方を変えて欲しいと言ってきた
すると、今度は何故か

「わかりました、お兄ちゃん！」

妹メイドになった

その後、コーチはかなり困っていたが、スルーして自己紹介を始めた

そして、女バスの全員は終わりコーチの番も終わって練習かな？と思いきや、見学している俺もやることになった…………俺見学者だよな？

「えーと、不知火翔、クラスは真帆達と同じでバスケ歴は……………少しです」

別に、思い出せなくなったわけじゃないぞ、ただ何年やってきたか数えるのが面倒になったただけだぞ！

「えーと、君も部員なのかな？」

なんて俺が考えてるとコー……長谷川さんが質問をしてくる
あっ！やべー、見学って事を言うの忘れてた

俺が見学のことを言おうとするが真帆が何か長谷川さんに言おうとする

「うん♪シヨウは女バスのメン「ちげーよ！？おい真帆、勝手に俺を女バスにいれるな！」何だと！？じゃあシヨウは何しにきたんだ」

「見学だって、さっき言っただろう！」

「まあまあ、ともかく君は女バスの部員じゃないんだね？」

「はい、そうです」

全く、勝手に女バスに入れられてたまるか

「長谷川さん。……あの、早速で申し訳無いのですが、今日からもうご指導をお願いしてもよろしいでしょうか？……すみません、不躰に」

俺が見学のことを長谷川さんに言うと、智花が身を縮こまらせるようにして、おずおずと打診してきたので、長谷川さんが皆に着替えるように言うが

「えーっ！何で着替えなきゃいけないの？」

「はぁー？お前マジでいつてんのか？」

「マジに決まってるんだろ、それにそのためにこれをはいてるんだぞ」
そう言って真帆がスカートの裾をまくりあげて見せてきた

長谷川さんは見ないようにしていたが、俺は真帆が自分でやったため（ここ重要）目を剃らそうとはしなかった
って何だよスパッツじゃねえかよ……

「そーそー、もっかんとサキも履いてるよ。ちなみにミニの下はブルマだよ」

と言って真帆は愛莉の後ろに立ち、愛莉のスカートまで見せてくる
今日初めて気づいた事だがミニの下のブルマは背徳感かなりある

そして、スカートをめくられた愛莉はというと

「きゃあっ！し、不知火君は見ないで！」

何で俺だけに見られたくないんだ！？もしかして、俺愛莉に嫌われてんのかな？だとしたら結構ショックだ

ちなみに、それから服装は自由ということになり、練習を始めた
どうやら今日は実戦形式にするらしい

最初は智花と真帆が攻め、紗季とひなたと愛莉が守りにつくらしい

そして、長谷川さんが愛莉に近づいて何か話している

「あのさ、愛莉って、背が高いよね」

「……っ！」

「だから………え？」

「……………あちゃ〜」

と、俺と紗季の声が重なる

そうだ、長谷川さんにあの事を言うのすっかり忘れてた

「う、う……………うわああああん！やっぱりっ！お、おおきいんだ！でか女なんだわたしっ！うえっ……………うええええ！いつ、いつしよう、でか女としていきていかなひゃいけないんらあっ！」

「え……………あ……………あの」

愛莉の突然の号泣に長谷川さんはどうすればいいかわからず、おろおろしている

「アイリーン！だめじゃないか、すばるんにちゃんと誕生日を教えとかないから勘違いされちゃったんだぞ！ちがうもんな、アイリーンは四月生まれだから、ちょっと成長が早いだけだもんな」

「そっ、そうよ愛莉！何度も言ってる通り愛莉は少し早熟なだけ！中学生になればみんな同じくらいになるわ！」

「おー、あいり、ティッシュ、あるよ？」

毎回思うがあんな説得と慰めでよく泣き止むよな〜

俺だったらふざけんなって言ってキレてるな

さてと、俺も慰めに行くとするか

「愛莉、大丈夫か？」

「ひっく……………えぐっ」

少し泣きながら首を横に振る愛莉、まあそりゃそうか

「ったく、またあれをやるしかないか、おい愛莉！」

「……っ！」

俺が今何をしているかと言うと、愛莉の頭を優しく抱きしめている
なんで俺がこんなことをしているかって？

それは前にもこんな感じのことがあって、その時はなかなか泣き止
んでくれなかったために真帆のバカが「ショウが抱きしめれば泣き
止むかも」とかいつて無理矢理やらしたら、驚くことに泣き止んで
しまったのだ

んで、愛莉がどうしても泣き止んでくれなかったら、俺が抱きしめ
ることになった

でもこれ、あんまりやりたくないんだよねー愛莉の鼻水とか涙が服
にべっとりつくから

「落ち着いたか？」

「う、うん。でもごめんね、不知火君に迷惑かけちゃって」

「俺は別にいいよ……ただもう時間だ」

時計をみると、十八時十五分、もうそろそろ帰らないといけない時
間だ

「ご、ごめんなさい長谷川さん。せっかく来てもらったのに。あの、
わ、わたし、取り乱しちゃって。」

「いや、いいんだ。俺が愛莉のこと何も知らないのに無神経なこと
を言っちゃったのがいけないんだし。今日はみんなと話して、少し
でもみんなと仲良くなれたからそれで十分だよ。さ、そろそろスク
ールバスの時間でしょ？俺も手伝うから、急いでやろう」

まあ、俺も手伝うくらいするか

そう思い手伝っていたら、智花がバスケットボールを手にとり、その場でワンハンドのジャンプシュートを放った
相変わらず美しいフォームだな

その後、長谷川さんが智花にボールを渡して、もう一度やってくれと頼んでいた

やっぱり、智花のシュートは高校生から見ても凄いんだな

でも、俺だってもっと練習して智花よりも美しい……いや、かっこいいと思われるシュートを目指そう

目標のシュート（後書き）

男バスと女バスとの勝負が結構続きそうです

真帆の焦り（前書き）

テスト期間だったので投稿が遅れました
急いで書いたので微妙かもしれませんが、どうぞ

真帆の焦り

今日は水曜日、あれから一日インターバルを挟んでの部活の日だ
準備運動をして、今日は昨日できなかった、模擬戦をすると、長谷
川さんが言っていた

ちなみに、今日はさすがにメイド服ではなくジャージにTシャツと、
普通の格好だった

だが、紗季は髪型はカチューシャで後ろになでつけたストレートヘ
アになっているうえ、眼鏡が淡いセピア色のアイガードに変わって
いた

おっと、紗季のことよりも今は模擬戦だな

とはいえ、智花は他の奴に合わせて力を押さえてるから見ても意
味がない

それに、他の四人は完璧に素人だ

真帆は運動神経はあるが、バスケの事を知らないためただがむしや
らにボールを追いかけてるだけの状態、つまり金魚のフンになっ
ているわけだ

だが、その事を真帆に伝えようとして、「金魚のフンだな♪」と笑
っていたら、真帆にボールをぶつけられた……俺はさりげなく伝
えたのに……

紗季は、フットワークをもう少し身につけた方がいいがそれは、バ
スケをやるうえでだったらの話であり、動きは悪くはない
あと、状況判断の思い切りのよさなど、司令塔の素質がある

まだ二人はいいが残りの二人は戦力になるのは少し先になるだろう
愛莉は引っ込み思案でメンタル面が弱いせいで、身長が高いという

良さを消してしまっている

ひなたは……まあ、体も小さいし、運動も慣れてないし、しょうがないか……

はつきり言わしてもらうが、まず男バスに勝つのは無理だな
そもそも、まだ創ったばかりの女バスが地区で優勝した男バスに普通勝てるわけがない

「まあ、長谷川さんが指導しても少しましになるだけだろうな……
…と、模擬戦が終わったか」

どうやら考えている間に模擬戦が終わり、休憩になったらしい
さてと、やることもないしあいつらと話していよう
そして俺は座って談笑してたりタオルで汗を拭ったりしている真帆達の所にいく

「お前ら、とりあえずお疲れ様」

「ええ、少し疲れたわ」

「ふふん♪サキ、もう疲れたのか？あたしはまだまだ余裕だぞ」

おい真帆、紗季を挑発すんなよ、じゃないと

「むっ、なんて言うのは冗談よ、私もまだまだいけるわ」

「なんて言って、実は疲れてんだろうサキ」

「そんな訳ないでしょうが……いいわ、じゃあどっちが疲れていそうか、翔にきめてもらいましょ」

ほらな、やっぱりこうなると思った
つか、こういうことがあるとなんで毎回俺がジャッジしなきゃいけ

ないんだ？

もういいや、こいつら無視しよう

「愛莉、お前結構びくびくしてたけど、やっぱり恐いのか？」

後ろから「ちよつと翔、なんで無視するのよ」とか「こらーシヨウ！あたし達を無視してアイリーンとイチヤイチャするなー」とか聞こえるが幻聴だな、うん無視無視

「う、うん…どうしても、その、恐くて…」

「なるほどな…ちなみにひなたは模擬戦、どうだった？」

「おー、ボールがあっちにいたりこっちにいたりして、たいへんだった」

あっちにいたりって…あー、パスのことか、まあそりゃパスをださないバカはいないだろ

うん？何か長谷川さんと智花が話してんな

ってあれ？真帆が長谷川さんの方にいるのまにか行って抱き着いてる長谷川さんも困ってるし止めさせるか

「おい真帆、長谷川さんが困ってるからその辺にしとけ」

「えー、なんでー？」

「いやだから長谷川さんが困ってるから止めろって…」

と、俺が真帆にさっき言おうとしたことを言おうとしたのだが真帆が俺の言葉を遮ってバカなことをいいだした

「あっそっか、シヨウ嫉妬してんだろ」

「はい？何言ってんだお前は」

「あたしがすばるんに抱きついてるのが嫌だったんだろ？」

「んなわけねえだろ！長谷川さんが困ってるから止めろって言っただけで、嫉妬してる訳じゃねえよ！」

「まったく、本当にこいつの思考回路が俺には読めねえ」

「まあまあ、えーと何処まで話したっけ？」

「最近の練習はせずにいて試合しかやっていないって所までです」

「あー、そうだった。でもメニューはあることにはあるんだよね？じゃあ新しいメニューを考えたりは、しなくて良いのかな？」

「いえ、そんなことないです！考えて頂けるとすごく嬉しいです！」

長谷川さんが、笑い顔き少しだけ困惑の色を混ぜたような顔をして智花に聞くと、智花はもの凄い勢いでかぶりを振った

「そーそー、考えておくれよ。あたしたちにも最近コージョーシンってやつが芽生えてきてさ、それでみーたんに頼んですばるんに来て貰ったんだから♪遠慮なくビシバシやりたまえ」

「そか、了解。それじゃあ智花が考えたメニューを元に、みんなの意見も聞きながら新しいのを作ろうか。じゃああと……三分したら集合かけるから、それまでもう少し休んでて良いよ」

真帆がなぜか偉そうなのが気になったが、突っ込むのが面倒なので

やめて、何してようかと考えていた時にそれは起こった

「おっけーい！じゃあすばるん、ステキなのを頼むぜ。一時間頑張るごとにレベルが3くらい上がっちゃうようなやつ！ぬふふ……一時間でレベル3上がれば、一週間だと……18か！ねえねえすばるん！レベル18ってどれくらい？18あれば地区大会で優勝するくらいは楽勝だよな？」

レベルに置き換えるなよ、長谷川さんが何のことだか全くわかってねえぞ

「うーん、どんなに頑張っても一週間で地区大会優勝レベルにはならないだろうなあ。だから、真帆が思っているほど急に上手くなるメニューはちょっと作れないよ、ごめんな。でも、出来るだけ良いのを考えてるからさ。一週間では無理でも頑張って続けられればいいかは」

長谷川さんが急に話すのをやめてしまった

なぜなら、さっきまで機嫌を良さそうに笑っていた真帆の表情が真面目なものに変わったからだ

「……………無理、なの？」

「…………え？……う、うん、ごめん」

「困るよ！」

「な…………え？」

「無理とか困る！作ってよ！お願いだから！ねえ何で無理なの？ゲームだと一晩粘れば余裕でレベル10くらいあがるじゃんか！だったら一時間で3くらい余裕でしょ？」

真帆とは結構一緒にいたが、こんな大声いや、絶叫を聞いたのは初めてだ

「おい真帆、あんま無茶言うな。それに、ここはゲームの中の世界じゃないんだから、そんな早くに上手くなるわけないだろ」

「うん、悪いけど翔の言うとおりだよ。……でも、大丈夫。真帆は運動神経が良いみたいだから半年……ううん、とりあえず一ヶ月くらいちゃんとしたメニューで真面目に練習すればきつとすぐに」

「一ヶ月も待てないよ！ えー、えー、こまったなあ。こまったなあ。すぐに上手くならないとダメなんだけどなあ。……そうだ！ じゃあ、メニューはやっぱりいいから必殺シュートとか教えて！ 敵を七人ぐらいなぎ倒してゴールに飛んでくやつ！」

「いや……んなもんねえよ、それに七人ってベンチまで攻撃してるじゃねえか」

「下手したら、審判にもあたるかもしれないな」

まあその真帆の鬼畜シュートの後真帆をなんとかだめすかしつつ、五人でメニューの検討をしていたが、ムードメーカーの真帆が意気消沈していたためか、ずっと空気が重く、まとまらずに微妙な感じで終わってしまった

真帆の焦り（後書き）

次はしっかりと書きます

本当にすみませんでした m

〔
m

コーチ最終日（前書き）

今回少し長いです

コーチ最終日

今日は金曜日。長谷川さんが来る日だ

まあ俺も本当だったら今頃体育館で長谷川さんが来るのを待っているのだが：

今、俺は紙飛行機を探して外にいる

ちなみに、何故俺がこんなことをしているかと言うと

「夏陽ー、見ろよこれ！」

「なんだよ：ただの紙飛行機じゃねえか」

「バカ野郎！これをただの紙飛行機だと思ふなよ。これはな、俺が今日最後の授業をフルに使って作った紙飛行機だ！」

「お前、なんかこそそやってると思ったら、そんなくだらないことしてたのか：」

「くだらないだと：：：お前俺がこの紙飛行機を作るのにどんだけ苦労したか知らねえからそんなことが言えんだよ！」

「そんな苦労するんだったら作るんじゃないやねえよ！」

夏陽がなんかいつてるが無視をして俺はこの紙飛行機について語る
「いいか夏陽、これはな：：：」

と、俺が喋ろうとした時、俺の紙飛行機が突然俺の手から消えた
「ふーん、これがあたしの授業をサボって作った紙飛行機か」

俺の一時間の汗と冷や汗の結晶をスリもビックリの素早さでとったのは、人外ロリ教師こと美星だった
まあここで俺がやることはただひとつ

「おい美星！」

「うん？どうした翔？」

俺はその場で土下座をして

「お願いします！美星先生！俺の紙飛行機を返してください」

「お前の中では土下座よりも紙飛行機の方が上なのか！？」

当たり前だろうが、あの紙飛行機は一時間もかかったんだぞ、それのためなら土下座くらいやってやるさ！

「にゅふふ♪そうだな、あたしに一回だけこれを飛ばさしてくれたらいいよ」

「えっ？そのくらいで俺の紙飛行機を返してくれるんだったらお安いごようだ」

俺はこの時にぬか喜びをしていた自分をぶん殴ってやりたい

「なあ、翔？これって力を抜いてやった方が遠くに飛ぶんだよね？」

「うん？ああそうだけど」

「そうかじゃあ力を抜いて、飛んでけー」

そう言って美星は紙飛行機を飛ばした……窓の外に……

「あっ、ごっめーん♪間違えて外に向かって飛ばしちゃった♪じゃ

あ翔、あたし仕事があるから」

「……………（どさっ）」

「お、おい翔大丈夫か？おい翔、翔ー！」

夏陽がなんかいってくる、あれ？俺さっきまでなにやってたっけ？
確か紙飛行機を作って、それを夏陽に自慢したら美星が俺の紙飛行機をとって、んで美星が、美星？……………美星！

「みーほーしー！」

「うわ、だ、大丈夫なのか翔？」

「それよりも美星はどこいった！」

「み、美星ならたぶん職員室だとおも「そうか！サンキュー夏陽、
待ってるよ、美星！」うぞってもういつちまった…」

んで、俺は美星をばこにしようとしたが、逆にされたので諦めて
今は紙飛行機を探してるってわけだ

「しかし、あの人外教師、どこまで飛ばしたんだ……………うん？あれは、
もしかしたら」

広場にある時計棟の近くの木になにやら白いものが引っ掛かってる
のが見えたので近づいてみる

「やっぱりな！あれ俺の紙飛行機じゃねえか！よし、さっさととつ
て体育館に急ぐか」

そして、俺は木に登って紙飛行機をとって体育館に行こうとした時

「うん？あれは長谷川さんと誰だ、あれ？」

時計棟のホールの中で俺と同学年くらいのやつ（ちなみに男だ）が腹を抱えてうんうん唸っていて、長谷川さんが心配して近づいていった

そして、長谷川さんがそいつに肩を貸してやり、保健室に連れて行くとした時突然、「いまだ！」と聞こえたと思ったら長谷川さんが袋を被せられて、数人のこれまた俺と同学年くらいのやつらに倒され、手と足をなわとびで縛られて台車で運ばれてどこかに行ってしまった

いやー、すごい手際の良さだな、そこら辺の誘拐グループよりも凄かったぞ

さてと、そろそろ追わないと見失うな……えっ？体育館に行かなくていいのかって？おいおい、こんな面白い事ほっとけねえよなあ？ほっとけねえよ

えーと確かこの辺だったと思うんだよな……おっ、いたいたってあれ夏陽じゃねえか！なにやってんだ？

俺は耳をすませて会話を聞こうとする

「おい、お前ら。こいつにションベンぶっかけるぞ」

「ぎゃーごめんなさいごめんなさいごめんなさい！」

さてと、盗み聞きなんてダメだよな

俺は、親友が女バスのコーチにションベンをぶっかける所を見たくはないのでさっさと立ち去ろうとした時

「うん？おい、誰かいるぞ！」

「なんだと！？ちっ、誰か捕まえろ！」

やば！ここで俺がやることはただひとつ

「さらばだ！」

逃げる！！当たり前だろうが、捕まったら俺までションベンをぶっかけられるかもしれないんだからな

「絶対にいやだー！」

そして、俺はやつらから必死で逃げて気がついたら、俺はいつも長谷川さんが入って来る体育館の裏側にいた

「ふうー、なんとか逃げ切ったな」

俺は安心して、体育館に入ろうとした時、後ろに誰か立っていたのであわてて振り返ると

「長谷川さん！？無事だったんですね！」

「まあなんとかね……ねえ不知火君、君に二つ聞きたいことがあるんだけどいいかな」

なんだろう？俺に聞きたいことって

「君は男バスと女バスが試合することを知ってたのかい？」

なっ！…そうか、さっき夏陽と話していたのはこのことか

「ええ、知っていました」

「じゃあ二つ目の質問、君はバスケット経験者なんだよね？なら、勝てないことはわかってたんだよね」

「ええ、ですが試合をするのは真帆達ですから、第三者の俺がどうこう言うつもりはありませんよ」

美星には言っただけだね

「そうか………不知火君、ちょっと頼みがあるんだけど頼まれてくれるかな」

「なんですか？」

「えーと、真帆達に俺がコーチをしても男バスに勝つことは無理だ
って言うつもりなんだけど、真帆達がショックを受けるだろうから」

「俺に慰めろってことですよね」

「うん。後始末を頼むようで悪いんだけど」

「いいですよ別に、頼まれなくてもやるつもりでしたから」

「そうか、おっと、そろそろ行こうか」

「そうですね」

そして、俺は長谷川さんと一緒に体育館の扉を開けて中に入る

「長谷川さん！良かった、今日はいらしてもらえないのかと……。」

あの、実は私たち、長谷川さんをお願いがあるんです……！！」

扉を開くなり、表情を輝かせた智花が走り寄ってきた。それに続いて四人も安堵したように距離を詰めてくる

こりゃ、かなり言いにくいだろうな長谷川さん

「あの……コーチして頂くの、今日までということになってしまったけど、もし出来るなら」

「さっき、男バスの子と話をした。聞いたよ、試合のこと」

「あ……………」

長谷川さんが智花の懇願に途中で割って入る。長谷川さん、辛そう
だなんて当たり前か：

「ごめん、無理だ。試合する事が良いとか、悪いとかじゃなく、俺
には君たちを勝たせてやれるような指導をしてやることは出来ない
よ。勝ちたいなら、他の方法を考えた方が良い。このまま俺がコー
チをしても……結果は変わらない」

そして長谷川さんは踵を返して、ドアのノブに手が掛かった瞬間
「すばるん！」

真帆が長谷川さん呼び止めた

「……真帆」

「他の方法なんてないよ！すばるんしか！すばるんしかないもん
！もうあたしたちには！お願い、助けて、助けてよすばるん！」

「真帆、ごめん。俺には、どうもしてやれない。それに……真帆た
ちのことも可哀想だとは思うけど、ちょっとだけ男バスの気持ちも
わからなくはないんだ」

「っ！ひどい、ひどいよ」

長谷川さんの最後の一言を聞いて泣きそうな顔をして真帆が走って
でいく

「あっ、真帆！」

「紗季はここにいて最終日の練習をしろ！真帆は俺がなんとかする」

俺は紗季にそう言って真帆を追いかける

「よし、やっど、捕まえたぞ真帆」

「……………シヨウ」

俺は真帆をなんとか校門の前で捕まえた

「……………離せよ」

「いやだね。離したらお前はまた逃げるかもしれないからな」

俺がそう言うのと真帆は何も言わなかった。こいつ、また逃げるつもりだったな

「なあ真帆、なんでそこまで女バスでのバスケットにこだわるんだ？別にバスケットだったら他でいくらでも…」

「他じゃだめだ！あそこじゃないと、女バスじゃなきゃだめなんだよ」

「だから、なんで女バスじゃなきゃだめなんだよ？」

「……………あたし、バスケットやるのも確かに楽しいけど、女バスのメンバーでやるバスケットはもっともっと楽しいんだ。だから、あたしはあの場所を失いたくない」

まさかあの真帆がこんなこと思ってるとは思わなかった。しかし、あの飽きやすい真帆が楽しいか……

できることなら助けてやりたいけど、俺は人に教えたりするのはあ

んまり得意じゃないから無理だ。そう俺にはな

「おい真帆、とりあえず戻るぞ」

「いやだ！」

「いやだ、じゃねえよ。みんなが心配するだろうが」

「うっ！？……あーもう！わかったよ、戻ればいいんだろ！戻れば
！」

「そうだよ、戻ればいいんだよ」

このあと体育館に戻ったはいいものの、真帆は練習に参加しなかった

さてと、明日長谷川さんの所に行って指導をしてもらえるように頼むかな。まあ昨日と言ってることが違うと言われるかもしれないけど仕方ねえか。あいつが……いや、あいつらが泣くところはみたくな
いしな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1446x/>

気のむくままに

2011年10月27日02時05分発行